

沖縄県高等学校ボクシング春季大会

4月21日(土)から23日(月)にかけて、本校体育館リングにおいて沖縄県高等学校ボクシング春季大会が開催され、個人の部で、1位ライトウェルター級 **金城零己君**(13組)、ミドル級 **大城惟安マイケル君**(2海)(2人とも認定優勝)、2位バンタム級 **山口臣馬君**(11組)、3位ピン級 **ノーブル偉安君**(9組)、ライト級 **當間蓮生君**(7組)が入賞しました。インタビュー、、、。

金城零己君：「相手の体重オーバーにより、戦って手に入れた優勝ではないけれど、今まで走り込んできたので体力には自信があった。1Rから積極的に前に出る試合展開で、少し離れた距離で効果的なパンチを出すイメージを作ってきた」と、試合が出来なかったことを残念そうに語っていました。ボクシングの良さを「全力で戦った相手と最後に握手を交わす感覚が通常のスポーツの感覚ではない」とし「ボクシングを道具に人格の完成を目標としたい」とあり、ハキハキと淀みのない口調で話してくれました。

大城惟安マイケル君：「高校1年生の2学期から始めたボクシングだが、スパーリングで友人や先輩から指導してもらおう中で、自分が成長していく過程がわかり、すごく気持ちがいい。練習では出来ていてもスパーリングで実行出来なかった悔しさを、帰宅してから走り込みや、シャドウボクシングで反省ができる」とボクシングの楽しさを話してくれました。家族から「ボクシングを続けて(人間が)変わったとよく言われます。練習は辛いけど、ボクシングで自分をさらに磨き、自分を変え、全国のチャンプを目指すことが目標」とありました。

山口臣馬君：ボクシングを始めるきっかけは、自身も選手だった父の影響が大きかったそうです。中学校1年からボクシングを始めて、現在では国内チャンプも視野に入る選手に育ちました。ボクシングをやっている一番嬉しいことは「生活習慣が変わって、精神力が強くなったことです」とし「ボクシング以外の様々な問題にも正面から向き合い解決出来る様になりました」将来の夢は「体育大学へ進み、国内アマチャンプそしてプロになることです」と礼儀正しく謙虚で強い意志を感じさせる言葉で話してくれました。



ノーブル偉安君：ボクシングを始めたきっかけは「強くなりたかったから。」ときっぱり。「中学生の頃は泣き虫でした」と続け「特にメンタル面で強くなりました。最初ボクシングを始めることを家族に告げると複雑な表情で躊躇していましたが、今まで長続きしなかった部活動を1年間続けることができ、現在では家族も応援しています」とありました。彼は、卒業を待たずに米国へ転住する事が決まっているため「残りの1年間で是が非でも1度は優勝したい」と目をきらきらさせて話していました。



當間蓮生君：今大会での準決勝の相手は全国チャンプでした。その相手に互角の戦いを見せたのですが、惜しくも3位になった悔しさが終始インタビューの間に滲み出していたのが印象的でした。中学生の頃総合格闘技に憧れ、高校でボクシングを選んだことに「最初は1Rを立つことも出来ず苦しかった。今ではあの頃よりも格段に強い自分がある」とし「インターハイでは、この相手に雪辱を果たすことを目標に頑張る」と静かに、しかしまっすぐ前を向いて話してくれました。



インタビュー後の印象として、彼らに共通することは「ボクシングで(自分が)変わりたい。(自分を変えたい)」という強い意志を持っていることと「(自分を)変えることができた」ことに無上の喜びを覚え「さらに精進を続けることができる自分になった」ことです。そして自分を支えてくれる指導者や家族に感謝の心が芽生えています。毎日10Kmのロードと苦しいスパーリングをこなし、夢に進む彼らはまさに『心身ともに鍛鉄』なのです。

北緯 10 度 40 分 東経 131 度 30 分 進路 100 速度 8.4 ノット

数名の軽い船酔いの者があるみたいですが、皆元気で順調に航海を続けています。この記事がUPされる頃は操業が始まっていると思います。

